

平成 29 (2017) 年度 研究報告書
南部地域の活性化に向けた調査研究Ⅱ

比嘉康則 研究員

要旨

人口減少・少子高齢化の進む豊中市南部地域の活性化に向け、何が求められるのか。南部の人口と活動を抑制しているかもしれない要素や人口と活動の促進に結びつく可能性のある要素を見だし、今後の地域活性化の方向性について考察と検討を行う。

本研究は、2年研究の2年目にあたる。昨年度は、「人口」「産業・経済」「コミュニティ」の各側面についてネガティブな状況（停滞局面）からポジティブな状況（活性局面）へと移行することを、地域活性化として捉えた。しかし、地域の産業の状況、雇用状況、居住者の経済状況を示す「産業・経済」、地域内の非営利活動（地域自治、NPO活動、近所づきあい）と「人口」は同じ水準にあるとはいえない。3つの側面を並列的に捉えると、各側面が互いにどう関連しているか表現しづらい。したがって、今年度は地域活性化を「人口」×「活動（産業・経済・コミュニティ）」として捉えることとした。

昨年度の調査研究では南部地域のネガティブな側面が強調されすぎてはいないかという危惧があった。そして、調査を通じて意識の再帰的状況の発生が想定される。したがって、今年度は地域のポジティブな側面を意識的に押し出すことにした。

本年度は大きくわけて3つの調査分析を行った。

- 1) 庄内駅周辺の経路観察による大阪音大生と若い世代の往来者の滞留状況分析
- 2) 質問紙調査の自由記述データに基づく地域イメージの計量テキスト分析
- 3) 20歳～40歳代の南部地域居住者へのインタビュー調査による地域生活の諸相（居住地選択、買い物行動、つながり構築、地域の環境評価など）の分析

結果については以下の通りである。

- 1) 庄内駅周辺で滞留している学生は非常に少ないことが分かった。ただし、駅西側では属性間の滞留の差が小さかった。
- 2) 南部地域のイメージと居留意向の関係について分析した結果、豊中市北東部や中北部との間に違いがみられた。「治安」に関するネガティブなイメージを抱いている人は転出傾向が強く、「人間関係」に関するポジティブなイメージを抱いている人は定住志向が強い傾向にあった。
- 3) 居住地選択に関連して、対象者のライフコースやライフスタイルから地域に引き付ける力（引力）と地域から押し出す力（斥力）を析出した結果、引力の弱さ、あるいは斥力の強さとして地域からの転出志向を、引力の強さ、あるいは斥力の弱さとして地域での定住志向を理解することができた。

以上の結果をもとに、地域の活性化に対する方向性として以下の4点を示した。

- ① 「駅前」を学生の滞留が起こりやすい空間にする。
- ② 「居場所」を介して単身者と地域をつなげる。
- ③ 「音楽」の仕事を地域から発信する。
- ④ 「下町」イメージを再構築する

目次

- 第1章 はじめに
第2章 庄内駅周辺の空間における学生の滞留状況
第3章 豊中市の若い世代の地域イメージと居留意向の確認
第4章 アンケート調査の定量的分析
第5章 おわりに